

知的障害のある児童生徒のための教科指導実践

県総合教育センター特別支援教育部

1 はじめに

知的障害のある児童生徒の学習上の特性として、「学習によって得た知識技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくい」、「抽象的な内容の指導よりも、実際の生活の場面の中で、具体的に思考や判断、表現できるようにする指導が効果的である」、「児童生徒が一度身に付けた知識技能は、着実に実行されることが多い」等が挙げられる。そのため、実際の生活に即しながら、繰り返して学習することにより、必要な知識や技能を身に付けられるようにする継続的、段階的な指導が重要となる。

2 知的障害のある児童生徒への教科指導

知的障害教育の各教科の指導では、一人一人の児童生徒の実態に合わせて、興味や関心、学習状況、経験等を十分考慮しながら、指導内容を、選択・組織することが求められる。

ここでは、小学校知的障害特別支援学級の国語の実践例を紹介する。（「特別支援学級担当者のための専門性向上パッケージ」より、県総合教育センター Web サイトからダウンロード可能）

(1)単元名

ことばあつめをしよう（13時間）

(2)内容

小学部2・3段階、小学校1・2学年

(3)単元の目標

- ①絵を見たり友達の発表を聞いたりして身近な言葉を知り、言葉を増やすことができる。
- ②絵本などの読み聞かせを通して、語句から事柄を思い浮かべたり、話の大体を聞き取ったりすることができる。

- ③言葉と言葉の続き方に注意して、文を作ることができる。

(4)教材・教具

教科書「こくご☆☆」「こくご☆☆☆」（文部科学省）・1年生教科書（教育出版）、絵本、絵カード、文字カード、助詞カード

(5)指導の概要

始業式で経験した「先生の名前当てクイズ」を想起して、友達や自分の名前に入っている文字を使って、身近なものの言葉を集める学習を行う。児童の実態に応じて、集めた言葉や文をノートに書いたり、絵カードと文字カード、絵カードと絵カードのマッチングをしたりする。言葉を見つけれない児童には、実物や絵カードを提示し、そこから選べるようにし、集めた文字を発表するときには、選んだ絵カードを黒板に貼ったり、黒板に文字を書いたりして、どの児童も活躍できる場を設ける等の支援をしていく。学習の終わりには、集めた言葉が登場する絵本の読み聞かせを行うことで、言葉のイメージがより豊かになるように工夫する。回数を重ねていくうちに、友達の発表をよく聞いたり、それを真似て文を作ったりする等、児童同士の学び合う姿が見られるようになった。

3 おわりに

知的障害のある児童生徒は、成功経験が少ないことを勘案し、主体的に活動に取り組む意欲を育んでいくことが重要となる。そのため、児童生徒が頑張っているところやできたところを細かく見取り、認め、称賛することで、児童生徒の自信や意欲を高められる学習を展開していくことが求められる。